

生まれようとしている命を選別しないでパートⅢ

# 出生前診断とゲノム編集

—命のはじまりへの介入反対—

いま、命のはじまりでの“選別”と“生命操作”が、急速に進行しようとしています。

今春、日本産科婦人科学会は、新型出生前診断を臨床研究から一般医療に切り替え、実施施設を大幅に拡大します。国は、ヒト受精胚へのゲノム編集（遺伝子操作）を容認する指針を作成し、不妊治療で得られた胚を用いた研究が始まります。

ヒト受精胚へのゲノム編集とは、命のはじまりへ人間が直接介入するということです。

一度ゲノム編集を行えば、二度ともとは戻せません。遺伝子操作の影響は、世代を超えて引き継がれます。

地球が育んできた命を人為的に作り変えるというのは、とんでもなく傲慢な行為ではないでしょうか。

国は、当面、生殖補助医療の向上を目的とする基礎研究に限定し、胚は子宮に戻さないとしています。しかし、早晚、遺伝病「治療」の為だとして、ゲノム編集を施した受精卵を子宮に戻すことが求められ、さらには、望ましい資質や高い能力をもつ「人間改造」への道を開く可能性があります。

また、胚へのゲノム編集は、出生前診断を行い障害のある胚（胎児）は廃棄（中絶）することが前提とされている点も大きな問題です。

現在、出生前診断は、「高齢出産による胎児のリスク」といった医療やメディアの論調にあおられる形で、あるいは、多くの障害者や家族が当たり前に地域で生活している事実も理解されないまま、一般社会に広がり続けています。その背景には、障害に対する根強い差別や偏見とともに、ゲノム関連産業や検査・医療業界を潤す多額のお金が動いているのも事実です。これにゲノム編集が加われば、国と研究者主導で、「良い胚」と「不要な胚」の振り分けが進められ、社会に、さらなる分断が持ちこまれると考えられます。

いつも正常であることが求められ、健康であることを強いられることが、本当に人社会をこころ豊かにするのか、互いを認め合える社会となるのか、原点に立ち戻り、考えていかなければならないのではないかと、思います。

今回、昨年3月と11月に続いて、下記内容で3回目の集会を開催し、市民としての声明文を発表したいと思います。

沢山の方に参加していただき、「出生前診断と受精胚へのゲノム編集に反対する声明文」に賛同をいただきたいと思います。

日時：2019年3月17日（日）

12：30受付開始 13：00～16：30

場所：京都市北いきいき市民活動センター 集会室

京都市北区紫野北花ノ坊町18 TEL：075-634-7323 FAX：075-493-9688

（京都市地下鉄北大路駅より市バス206、204系統千本北大路下車北へ徒歩約5分）

生まれようとしている命を選別しないでパートⅢ

# 出生前診断とゲノム編集

—命のはじまりへの介入反対—

日 時 : 2019年3月17日(日)

12:30受付開始 13:00~16:30

場 所 : 京都市北いきいき市民活動センター 集会室

京都市北区紫野北花ノ坊町18 TEL: 075-634-7323 FAX: 075-493-9688

(京都市地下鉄北大路駅より市バス206, 204系統千本北大路下車北へ徒歩約5分)

参加費: 800円(資料代)

\*手話通訳の必要な人は3月5日までにお申し込みください

パネラー: 天笠啓祐氏(ジャーナリスト)

: 山口研一郎氏(現代医療を考える会代表・脳外科医)

: 岡田健司氏(自立生活センターアークスペクトラム代表)

: 佐々木和子氏(京都ダウン症児を育てる親の会)

司 会: 利光恵子氏(優生手術に対する謝罪を求める会・立命館大学生存学研究センター客員研究員)

フロアー発言: 矢吹文敏氏(JCIL 日本自立生活センター)

主催: 京都ダウン症児を育てる親の会(トライアングル)

グループ生殖医療と差別(旧優生思想を問うネットワーク)

共催: DNA問題研究会

現代医療を考える会

自立生活センターアークスペクトラム

協賛: JCIL日本自立生活センター

誕生日ありがとう運動京都友の会